

三頁、定價各貳圓貳拾錢)(村松)

● 一神論卷第三 序聽迷詩所經一卷

東方文化學院京都研究所編

本書は東方文化學院京都研究所の古書複製事業の一として景教經典にして我國に存する處の二經、即大正六年故富岡桃華氏の藏に歸したる一神論卷第三及び高楠順次郎博士所藏の序聽迷詩所經一卷を複製影印したものである。元來基督教の一派たるネストル教が唐代支那に於て

景教として大に流行したのは明白な史實であるにも不拘古來その經典が全く湮滅して傳らなかつたが爲に、景教の内容形式は勿論、支那に於けるその教義の如きも不明たるを免れなかつたのであつた。然るにかの近年數次に亘つて行はれた中央亞細亞の探險は遂に敦煌石室遺書の發見となり、景教にあつては大秦景教三威蒙度讚、一神論、序聽迷詩所經、志互安樂經、宣元至本經の五が見出されたのである。その諸經典の形式内容に就ては既に屢次羽田博士によつて藝文、東洋學報、内藤博士還曆祝賀

支那學論叢等に於て紹介發表せられ、

史史の貴重なる資料としては是等諸景典の複製は學界一般の要望する處となつたが而もなほ景教三威蒙度讚を除くの外は一として影印に附せられるに至らなかつた。

本書がかゝる際に、東方文化學院京都研究所によつて公刊せられたる所以、意義は今更喋々する迄もあるまい。印刷(コロタイプ)亦極めて鮮明である。鳥の子美濃倍版の唐本仕立て帙に收められてゐる。

尙附するに羽田博士の剴切なる解説を以てし、兩經の要旨を挙げ且その撰述は一神論は貞觀十五年、序聽迷詩所經亦景教傳來の初期に在り共に西方景士の手に成れるを論じ、經中に見出される處の聖書の語句、ソグド語の對音等を指摘せられてゐる。

營に支那史東洋史の専門家に止らず、苟も宗教史、東洋文化に關心ある人士必備の書として薦める。(彙文堂、丸善發賣、實價五圓)(内田)

● 天正遣歐使節記 文學博士 濱田青陵著  
切支丹の名は夢を、詩を、憧憬を與へる。一面には中